



と き : 2015 年 12 月 16 日 (水) 14:00~16:30

と ころ : 第 3 講義室

出席者 : 45 名 (講師含む)

演 題 : 日本は「島国」か「海洋国家」か？

〔講師コメント〕 海に囲まれた日本は「島国国家」と言われます。同じく海に囲まれたイギリスは「海洋国家」と言われています。師走のひと時、日本・日本人と海との関係を考えてみましょう。

講 師 : 放送大学神奈川学習センター所長 池田龍彦氏

<講師略歴>

昭和 46 年 3 月、早稲田大学理工学部土木工学科卒業。同年 4 月運輸省入省、国内外の港湾開発事業に従事、平成 12 年 7 月沖縄総合事務局開発建設部長を最後に運輸省退職、同年横浜国立大学大学院国際社会科学研究所教授に就任。平成 25 年 3 月横浜国立大学を定年退職し、放送大学神奈川学習センター所長に就任、現在に至る。昭和 50 年にスタンフォード大学大学院 (土木工学) を修了 (Master of Science)。

専門分野 : 国際開発・インフラ管理運営。運輸省では開発途上国への港湾分野の技術移転、大学では留学生教育に尽力をされた。

<講演要旨>

地球表面の 7 割は海で、宇宙から見ると地球が青く見えるのは水があるからである。海は生命の源である。雨を降らせ、多くの生き物がいて食料も供給してくれ、人間の存在のためには絶対必要である。しかし、海は 10m 潜ると 1 気圧、1000m で 100 気圧増える。宇宙の場合は真空状態で、真空ということは 1 気圧からゼロ気圧になるということだから、海洋に入っていくほうが宇宙へ行くより難しい。宇宙は見えるが、水中深く入っていくと光が到達しないので海の中を調査するのは難しい。水深 4,000m、5,000m の海底から、マンガンやメタンハイドレードなどを採るにしても、400 気圧の中でどのように採掘するか、とても難しい。海は秘密のヴェールに覆われている。

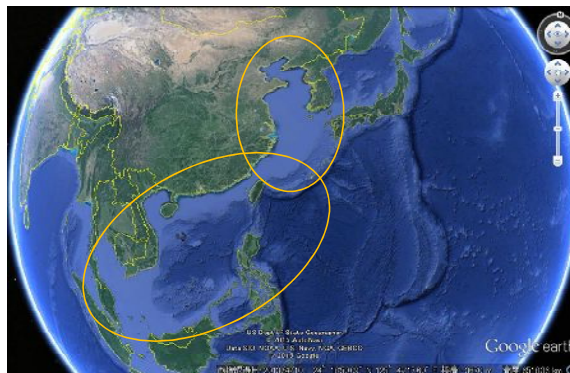
日本は陸上では天然資源に恵まれていないが、海に目をやると、生物や鉱物など相当な資源保有国である。

また、海外との交易は人々の生活を便利に、豊かにする。私たちは海を有効に利用しているが、一方で、地球温暖化の中で、台風やサイクロンの勢いが強くなっており、大きな災害を与えている。2011 年 3 月 11 日の津波は私たちの脳裏から離れない大被害を与えた。海は有用であるが、一方では牙をむいて私たちに襲いかかってくる。

◎沖縄



首里城、朝貢船、サバニ



琉球王朝の交易範囲

首里城には「万国津梁の鐘」がある。「津梁」とは架け橋のことである。沖縄は、地理的に世界のすべての架け橋となる中心に位置する。鐘には「舟楫をもって万国の津梁となす」と刻んでいる。沖縄は今から600年ほど前には交易の中心で、14～16世紀は琉球王朝の全盛期であった。北は中国、南はマレーシアのマラッカ、インドネシアまで船で行っていた。沖縄は明に対して貢ぎ物を送り（朝貢外交）、明からは冊封使が来るとい形で交流があった。中国の皇帝が龍を描くときは爪は5本、沖縄の首里城にある龍は4本、ちなみに日本の天皇家の龍は3本。沖縄は中国（明、清）に対しては朝貢関係にあった。江戸時代に薩摩の領地に入った。江戸幕府に対しても敬意を表して貢ぎ物を贈り、清に対しても贈るとい二股外交を行っていた。沖縄では武士は刀を持たず、三線を持つ。歌と楽器で中国の冊封使をもてなし、江戸や薩摩の客人をもてなすとい平和な人たちであった。今、普天間基地の移設・辺野古問題で翁長知事と政府との間が大変なことになって、どう決着するか心配しているが、元々平和を愛する人々である。

那覇の南に糸満の漁港がある。糸満の漁師は非常に勇敢で、サバニという小さい舟で、フィリピン、ヴェトナム、さらに南下してマラッカまで行っていた。彼らは小さな舟に食料を積んで行き、ヴェトナムの沿岸に住み、漁をしながらさらに南下していくとい生活をしてい。彼らは旅をしながら生活をしていくとい漁民であった。北の方は、中国の沿岸部、南京、北京とも朝貢関係があった。沖縄の人たちは海と共に生活していたとい過言ではない。

◎遣隋使、遣唐使



遣隋使（608-618：5回派遣）の渡航ルート



遣唐使の渡航ルート

当時は陸伝いの海路でないとい危なかった。遣唐使のルートは最初は遣隋使と同じであったが、図のように次第に島伝いに南を通るルートになった。中国からは、鑑真は難破に次ぐ難破で日本に着くまで10年か

かった。安倍仲麻呂は日本に帰れなかった。海を安全に渡るとは当時は非常に難しかった。

一方、元寇の襲撃を2回受けた(1274年10月、1281年7月)。朝鮮半島の木を切って舟を作って、日本を攻めたが、いずれも台風に守られた。蒙古来襲は日本にとって一つの大きなエポックであった。



蒙古襲来の図

向こうへ行く(遣隋使、遣唐使)のも大変、外国から攻めてくるのも大変だった。ここが陸続きの朝鮮半島と大きく違うところで、「島国」であることのメリットである。イギリスとヨーロッパ大陸の間の距離に比べ、日本と朝鮮半島や中国との距離は微妙に長い。英仏間の海底トンネルは日本の企業が受注して日本の技術で建設した。開通したときイギリス人は、「鉄道で結ばれるのは便利であるが、島でありたかった」と一抹の寂しさを感じたようである。第2次世界大戦の頃もトンネル計画があったが、当時の完成予想図では彼らは防衛のためトンネルの出口に大砲を向けていたそうである。

◎鎖国政策(1635-1854)

鎖国政策をとった大きな要因はキリスト教の布教であった。キリスト教が幕府の統治に悪い影響を与えると恐れ、キリスト教を禁じ、鎖国政策をとった。「鎖国」という言葉は江戸時代にはなく、明治になってから「当時の政策は鎖国であった」といわれるようになった。鎖国といっても、オランダと中国との貿易は長崎の出島で行われ、朝鮮半島とは対馬に基地があり合法的に交易ができた。薩摩は、南西諸島・沖縄との交易は自由にできた。外国ではないが、松前藩はアイヌとの交易をおこなっていた。

明治が近づくにしたがって北前船が博多や下関を經由して大阪に米を運んだ。東回りは夏場は台風のうねりが来るので、西廻りが中心であった。北海道の昆布は下関から薩摩に運ばれ、さらに沖縄へ行って、沖縄から中国に輸出された。今でも昆布の消費量は沖縄が一番である。

先ほど大事なことを言い忘れていた。実は、沖縄の泡盛の原料はタイのロンググレイン(長粒種)の碎米で、14世紀からそれで造っている。食管法で外米の輸入が禁止されていたときもこれだけは許されていた。

◎開国



1854年に日米和親条約、58年に日米修好通商条約など安政五ヶ国条約が結ばれた。外人居留地がつくら

れた関内では治外法権、また関税は相手国側の言うなりなど非常に不平等な条約で、これを何とか改訂させるというのが明治政府の基本的な政策であり、そのためには「富国強兵・和魂洋才の推進」の理念を基に日本の目標は明確だった。西欧の列強と同等の軍隊（海軍・陸軍）を持ち、西欧の技術を取り入れて、コピーするだけでなく、日本の優秀な知恵で開花させることを進めた。この考えは太平洋戦争まで続いた。

明治 27・8 年の日清戦争で日本は台湾、満州、韓国を日本の領土に組み入れた。日露戦争では日本海海戦で勝った。この後、日本がアメリカとよい関係を保てていたら戦争にならなかったはずであるが、うまくいかなかった。日本は中国に攻め入り、結局第 2 次世界大戦の敗戦ということになってしまった。

五か国条約から明治維新までの 10 年間に徳川幕府は 150 隻の戦艦を発注した。西欧に匹敵する強い海軍をつくり、外に向かって出ていく、これは軍事目的だけでなく、貿易立国としての日本を考えてのことであった。海はその国にとっていかに重要かということは当時からわかっていた。いま、中国は南支那海に埋め立てや飛行場建設などを進めている。これは国際的に大きな問題であるが、中国にすれば、海をいかに支配するかということに力点を置いているということであろう。

柳田国男の『海上の道』を改めて読みなおした。彼は日本人の祖先は南から来たという仮説を立てた。舟に乗って日本に来たのではなく、いつのまにか日本にたどり着いたのではないかと考えた。日本人のルーツについては北方騎馬民族の移動説などいろいろな説があるが、あながち南方から来たというのは間違いではないと考える。

もう一つ、高坂正堯が『海洋国家日本の構想』という本を出している。彼は「日本は東洋の離れ座敷である」と言っている。「離れ座敷」は直接母屋から影響を及ぼされない。中華文明から近からず、遠からずの場所にあるため、中華文明を輸入しながら、漢化されることはなかった。また、日本は極東ではなく、極西に位置すると見た。貿易立国、すなわち、船を介して交易することを主張している。（レジュメ参照）

◎ヨーロッパ諸国の海洋進出

15 世紀末以降、ポルトガル、オランダ、フランス、イギリスと相次いで海洋進出し、最後に勝ったのはイギリスで、七つの海を支配した。しかし、中国が提唱した AIIB に真っ先に参加を表明するなど、今のイギリスは凋落していて話にならない。

17～19 世紀のヨーロッパはすごいエネルギーで海洋に向かって出ていき、植民地を獲得し、富を自国にもたらし、奴隷もアフリカからアメリカ、ヨーロッパや南米に持ってきた。非常にシビアな状況であった。

一方、日本は平和裡の交易という形で海洋に出ていったが、鎖国によって海から離れてしまった。しかし、江戸時代には文化が栄え、人口は 2,000 万人から 3,000 万人に増えている。

海洋に出ていくほうがいいのか、島国でいるほうがいいのか（ここで「日本の島国のいいところ、悪いところ」について参加者に質問）

- | <u>よいところ</u> | <u>悪いところ</u> |
|--------------|--------------|
| ・ 侵略されない | ・ 交流がない |
| ・ 気候温暖 | ・ 外国語に弱い |
| ・ 漁業資源 | ・ 交渉力が弱い |
| ・ 輸送 | ・ 内向き |
| ・ 防疫 | ・ 積極性に欠ける |
| ・ 景観 | |
| ・ 単一民族 | |

日本は風光明媚の穏やかな気候の中、上記のようによい面はあるが、積極性に欠けるところがある。

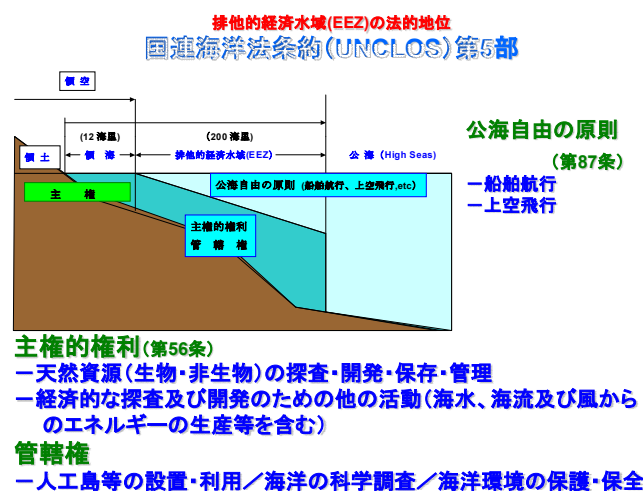
◎国連海洋法条約 (UNCLOS, United Nations Convention on Law of the Sea)

1973年から9年間かけて検討した。発効したのは1994年11月16日で、日本はそれから1年半ほど後、1996年7月20日に批准した。今年の1月にパレスチナが加盟して現在の締約国数は167国である。実はアメリカは加盟していない。軍事的に制約条件を受け、資源の問題でも自国が不利になる可能性があるという理由である。この条約では、領海、接続水域、排他的経済水域、大陸棚、公海、深海底の区分などを規定している。科学調査や環境保全なども取り決め、さらに沿岸国だけでなく、内陸国の権利も規定している。

日本の国土面積は38万km²で世界の61位であるが、200海里（排他的経済水域）で囲むと447万km²となり、日本は6位という海洋国である。

南鳥島には自衛隊と国土交通省の気象観測所がある。大きな船が着けるように工事をしているところである。沖の鳥島は環礁であるが、ハイ・ウォーター、水位が高くなってもちょっとだけ海面から出る岩がある。波で壊れては困るので、30年ほど前にテトラポットで囲み、ネットを張って保護している。

中国は南西諸島で埋め立てているが、実はハイ・ウォーターの時には水没するので、埋め立ててはいけないことになっているのに、実力行使で埋めてしまった（フィリピンが提訴している）。



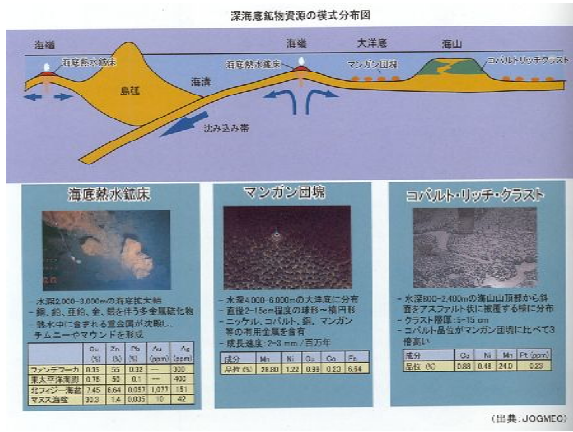
領海は12海里、また陸地から200海里が排他的経済水域で、ここは航海は自由であるが、ここにある魚や貝あるいは地下資源はその国に所属する。(詳細はレジュメ参照)

◎水産資源、地下資源

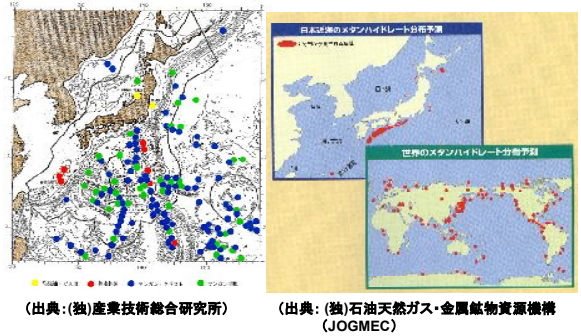
日本の漁獲量(2013年)は477万トンになってしまった。中国の漁獲量は急激に増加し、7,300万トンと獲りすぎている。

日本の排他的経済水域の中にはマンガン、熱水鉱床、メタンハイドレードなどが多い。日本は陸上の資源は少ないが、海の中の資源は豊富である。

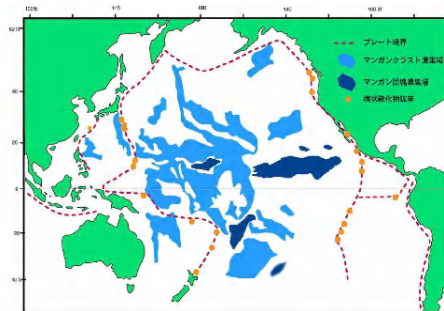
2007年に海洋基本法を作った。これから海洋基本計画を作りしっかりやっとうと総合海洋政策本部を設置した。本部長は内閣総理大臣で、副本部長が菅官房長官と海洋政策担当大臣となっている。



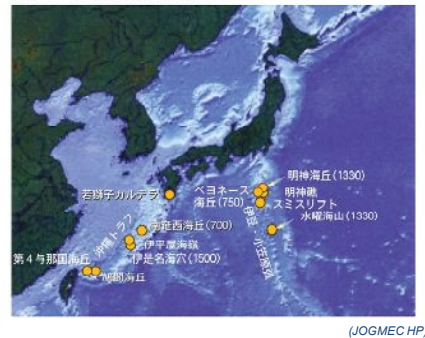
日本のEEZの多様な海洋鉱物資源ポテンシャル



太平洋の深海底鉱物資源の分布



図表 15 日本近海の海底熱水鉱床



◎海峡

地中海はマグロが獲れる。ジブラルタル海峡は潮の満ち引きが強いが、ボスポラス海峡は黒海にドナウ河など大きな河の水が流れ込むので流れは一方通行。スエズ運河は明治 2 年に開通した。



海峡

スエズ運河

総延長: 167km
水深: 24m
(喫水: 20m)
最大幅: 77.5m
24万DWTの船舶が通行可能)

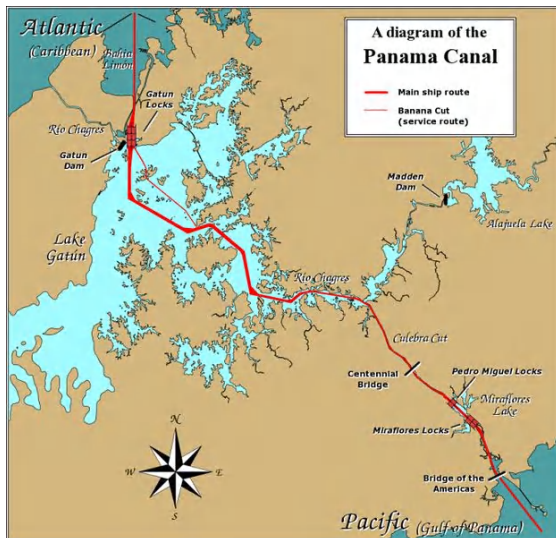
1858年: 着工
1869年: 開通

ムバラク橋 (2001年完成)

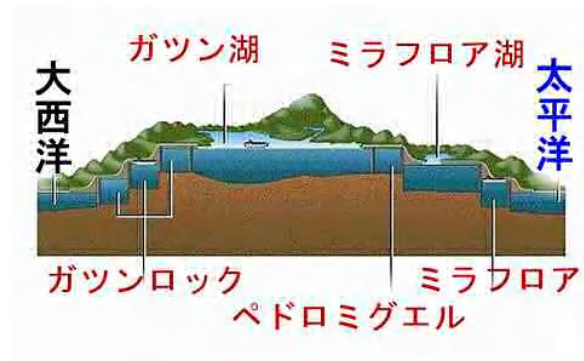
コンボイを組む船舶

スエズ運河

パナマ運河 (80 km) は、できるまでは南米を回っていたが、人造湖を作り、24mの高低差を閘門によって通行する。年間 5,000 ミリも雨が降るのでこういう方式がとれる。現在、さらに大きな船が通る新たな運河を建設中で、2016 年には開通する予定である。



パナマ運河（全長 80 km）



パナマ運河の断面図

◎食料自給率

日本の食料自給率は40%である。

自給率は、そば（25%）、車エビ（5%）、ころも（15%）、しょうゆ（大豆は5%）ということで、コンビニで輸入品を外していくと商品がほとんどなくなってしまう。純国産は米ぐらいである。

演題が「島国か海洋国家か」と大きな命題だったが、極めて雑駁な話に終始してしまった。今日の話に基づき是非「海」のことを考えてほしい。この秋からシーカヤックの面接授業が始まった。水面に浮かんでみると海のことがよくわかる。都市から流れる汚染物質が港を汚している。水面にはいろいろな浮遊物があり、一人ひとりが環境改善をしなければいけないことがよくわかる。水面の位置から見る横浜の街の景色も、陸上で見る光景と大きく違っている。船で海に出てみるのはとても興味深いと思う。海はみんなのものであり、海と親しんでもらいたい。

ご清聴ありがとうございました。

（文責：植地 勢作）